

るおひ 類比〔名〕「たぐひ。比較。比類。『哲』次條に同じ。
るおひすなり 類比推理〔名〕「哲」るあす
るおひやう 類病〔名〕「類似のやまひ。類
るおひん 諷文〔名〕「死者の生前の功德
をたたへたる文。
るおへい 腐兵〔名〕「腐弱の兵。『腐徳。
るおへい 腐敗〔名〕「つかれよわること。
るおへき 壘壁〔名〕「『壁も壘(れき)の義』
とて。堡壘。壁壘。
るおへつ 類別〔名〕類によりて別を立
つること。るわけ。種類わけ。部分
分類。
るおへん 類編〔名〕類聚して編纂する
こと。又その編纂したるもの。『同じ。
るおへん 類本〔名〕「るあしよ(類書)に
るおへん 類夜〔名〕「夜を累(る)ぬる義。れ
んや(連夜)に同じ。
るおやく 類藥〔名〕「處方又は効能の類
るおやく 累卵〔名〕「卵を積みかさね
ること。『史記の范雎傳に「秦王之國、
危於累卵。得(得)臣則安」とあり』倒れ易
く、極めて危き状態の譬。
るおりん 類林〔名〕「林は文林の義。記
事又は語句を、項目を分ちて類聚したる
書籍。類苑。
るおるお 累果〔號〕「重なりあひ又は並
びつづくさま。『疊果累』
るおるお 疊疊〔號〕「元氣無くうなだ
るさま。『疊疊たる喪家の狗』。『繋
り續くさま。『疊疊として、貫珠の如し』
るおれい 類例〔名〕類似的例證。
るおれき 瘰癧〔名〕頸部の淋巴脈の腫
れて、大小幾多の結塊を生ずること。醫
學上よりいへば、數種の病症を含めども、
腺病質の小兒に發する結核性淋巴腺腫
は、その主なるものにして、遂には化膿、
潰瘍を來す。類腺腫。
るおわけ 類分〔名〕るあへつ(類別)に同
じ。
るおん 類苑〔名〕るありん(類林)に同
じ。

れ

【發音】『行第四の音。
子音「ロ」が母音「エ」に結び
附きて發す。その發音
の方法・位置に就きて
は、ら及びえの條下に説
けるが如し。』長音
は、れえと記す。とれと記
すとの兩法あり。本書
にては、前者に依れり。
『一語の中にて、れの直
下にい又はひの續く時
は、通例、相合して、れの
長音に發音す。例へば、
れい(例)・ふれい(無禮)・
れい(憂)・かれい(蝶)をラ
エ・ブレエ・ウレエ・カレ
エと發音する類。』
語の中にて、れの直下
に又又はふの續く時は、相
合して、揚長音リヨオと
なる。例へば、れりヨ(料
理)・れふじゅう(獵銃)・うれ
ふ(憂)をリヨオリ・リ
ヨオジュウ・ウリヨオと
發音する類。
【字源】平假名れは、漢字
「禮(漢音レイ)」の古體
なる「礼」の草體、變體平
假名礼・礼も同字の草
體、少は「連(漢音リョウ
レン)」の草體、無は
「麗(漢音レイ)」の草體
より出づ。片假名レは
「礼」の略體。萬葉假名と
しては、前記「禮」・「連」・
「麗」の外字音に據れる
ものに「列」・「例」・「烈」・
「戾」・「黎」等、訓を取り
たるものに「村(アレ)」の
訓あるより、そのアを略
して用ゑる等あり。

趾間は、その基部にこ
れを連結する膜を
有すれども、これ
は三趾を有し、その
の基部には膜を
存せず。羽毛灰色
にして、頭と頸とは
黒し。南米アルヘンチナ
及びバタゴニアの平原に産す。
れい 禮〔名〕「人々相交はる
に、相當の敬意をあらはし、動作の儀式を
守ること。あや。行儀作法。禮儀。『人に
逢ひたる時、敬ひて拜する。あいさ
つ。おじぎ。敬禮。狂言(兼)所のみ代ち
や。はあ、存じませなんだ。お禮申しま
す。』』忝き意を示す言葉。謝辭。(多く
は、接頭語お(御)を添へて用ふ)『謝禮
として贈る金品。謝儀。禮物(お礼)。
『書』ら(い)き禮記に同じ。平並禮に云は
く、父の仇には、俱に天を戴かず。』
禮の三本〔句〕「天地は生の本、先祖は
禮の本、君子は治の本なりといふ諸
禮の用は、和を貴しと爲す〔句〕『論
語の學而篇に「有子日、禮之用、和爲
貴」とあるに本づく。』禮は、尊卑・長幼
の別を正しくするにありて、その節制
固より嚴重なれども、嚴に過れば、相
互に疎隔するに至る患あるが故に、情
意の和合を貴ぶ。『諺語』
禮は慎の至れるなり〔句〕『論語八
佾篇の「子入大廟、每事問」の條の朱
子所註に「孔子言、是禮者、敬謹之至
乃所以爲禮也。』』伊日。禮者敬而
已矣。雖知亦問、謹之至也』と見ゆ。』
丁寧の上にも丁寧に、敬謹の心を怠
せざるが、眞の禮なり。『諺語』古事談
「禮はつつしみの至れるなりと云へり」
禮は往來を尙ぶ〔句〕「禮記の曲禮篇
に「禮尚往來。往而不來、非禮也。
來而不往、亦非禮也」とあり。』互に往
來して相訪ふは、禮の中の最も尙ぶべ
きものなり。『諺語』
禮を言ふ〔句〕「怨の意を言語又は行爲
に現す時に、殊更に反對にいふ語。



(あ れ)

禮を申す〔句〕「前條の意を、丁寧なる
口調にていふ語。
れい 例〔名〕「古來又は世に廣く存し、
或はその人の平生の行爲にあらはれて、
珍しとすべからざること。當によく有る
こと。通例。慣例。伊勢世の中の例と
して、思ふをば思ひ、思はぬをば思はぬも
のを」『源氏物語の程にさむらひたまふ
例なき事なれば』』過去又現實に於ける
事物の、典據・標準とするに足るもの。
先例。實例。例證。其「年老いて物の例
など知て、おもなきさましたるも」
例ならず〔句〕「常の狀態とは變りて
あり。普通とは變りて珍し。其「雪、
いと高く降りたるを、例ならず御格子
まゐらせて」』源氏例ならぬ人侍り
て。』氣分、常と變りて、快からず。病
む。不例なり。違例なり。其「見苦し
きもの、例ならぬ人の前に、子をゐて出
て來たる」』水鏡父みかど、御心ち例な
らずおはせしかば』
例に違ふ〔句〕「前條に同じ。諸國」ただ
今、心地少し例にたがひて、世の中を心
細く覺ゆるとて、打臥しけるが』
例に依つて、例の如し〔句〕「いつも同
じ事を繰り返して、珍しき所無し。
例の〔句〕例の如く。いつものとほり。
其「御前近くは、例の炭櫃(すす)の火、こ
ちたくおこして」』源氏例の、腹だち怨
ずるに」
れい 令〔名〕「おほせ。いひつけ。命令。
下知(し)。日坊(の)長官。坊令。日政
所(の)次官。日けん縣官。日長官。
縣令。
れい 冷〔名〕「ひやかたること。
れい 零〔名〕「數の全く無きこと。
れい 鈴〔名〕「形、鐘に似て、甚だしく、舌
と柄とありて、振て鳴らす佛具。密行
(びぎ)を修する者これを用ふ。りん。夫木
「霧深くそことも知らぬ山寺に遙かに響
くれいの音かな」』平家「高野山は、……、
れい 癩〔名〕「えやみ。疥癩。

るあ 類苑〔名〕るありん(類林)に同
じ。

れあ (英 Blue)〔名〕「鳥。形熊駝鳥に似たれども、やや小く、趾
は、駝鳥にては第三・第四趾のみにて、兩

れい 趾間は、その基部にこ
れを連結する膜を
有すれども、これ
は三趾を有し、その
の基部には膜を
存せず。羽毛灰色
にして、頭と頸とは
黒し。南米アルヘンチナ
及びバタゴニアの平原に産す。

れい 禮〔名〕「人々相交はる
に、相當の敬意をあらはし、動作の儀式を
守ること。あや。行儀作法。禮儀。『人に
逢ひたる時、敬ひて拜する。あいさ
つ。おじぎ。敬禮。狂言(兼)所のみ代ち
や。はあ、存じませなんだ。お禮申しま
す。』』忝き意を示す言葉。謝辭。(多く
は、接頭語お(御)を添へて用ふ)『謝禮
として贈る金品。謝儀。禮物(お礼)。
『書』ら(い)き禮記に同じ。平並禮に云は
く、父の仇には、俱に天を戴かず。』
禮の三本〔句〕「天地は生の本、先祖は
禮の本、君子は治の本なりといふ諸
禮の用は、和を貴しと爲す〔句〕『論
語の學而篇に「有子日、禮之用、和爲
貴」とあるに本づく。』禮は、尊卑・長幼
の別を正しくするにありて、その節制
固より嚴重なれども、嚴に過れば、相
互に疎隔するに至る患あるが故に、情
意の和合を貴ぶ。『諺語』
禮は慎の至れるなり〔句〕『論語八
佾篇の「子入大廟、每事問」の條の朱
子所註に「孔子言、是禮者、敬謹之至
乃所以爲禮也。』』伊日。禮者敬而
已矣。雖知亦問、謹之至也』と見ゆ。』
丁寧の上にも丁寧に、敬謹の心を怠
せざるが、眞の禮なり。『諺語』古事談
「禮はつつしみの至れるなりと云へり」
禮は往來を尙ぶ〔句〕「禮記の曲禮篇
に「禮尚往來。往而不來、非禮也。
來而不往、亦非禮也」とあり。』互に往
來して相訪ふは、禮の中の最も尙ぶべ
きものなり。『諺語』
禮を言ふ〔句〕「怨の意を言語又は行爲
に現す時に、殊更に反對にいふ語。

ひ、小なるに儀といふ」禮をつくす儀容。禮の儀制。作法なり。禮。禮式。『しやき謝儀に同じ。』
「禮儀、いかほど入り候はんや」

禮儀三百、威儀三千【句】『中庸に「優儀大哉、禮儀三百、威儀三千、待其人而後行、故曰、苟不至德、至道不凝焉」とあり。』禮の簡條は、大體に於て三百、その細目に至りては、三千もありて、支那周代の敬禮の儀制の整へるを形容していひし語。

禮儀も事に依る【句】いかに禮儀なればとて、事と場合とを考へてすべし。【語註】

れいき 令儀【名】うるはしき儀容。

れいき 靈樞【名】死體を入れてあるひつぎ。

れいきん 禮金【名】謝禮として贈る金。

れいきん 靈寓【名】れいてう(靈龜)に同じ。

れいきん 厲禁【名】げんきん(嚴禁)に同じ。

れいきん 禮銀【名】れいきん(禮金)に同じ。

れいきん 靈香【名】れいかう(靈香)に同じ。

れいきん 厲香【名】れいかう(靈香)に同じ。

れいきん 厲香【名】れいかう(靈香)に同じ。

れいきん 厲香【名】れいかう(靈香)に同じ。

れいきん 厲香【名】れいかう(靈香)に同じ。

れいきん 厲香【名】れいかう(靈香)に同じ。

れいきん 厲香【名】れいかう(靈香)に同じ。

れいきん 厲香【名】れいかう(靈香)に同じ。

れいきん 厲香【名】れいかう(靈香)に同じ。

れいきん 厲香【名】れいかう(靈香)に同じ。

ル或は鹽化メタル等を、二重の管の内管内に通じ、内、外兩管の間に冷水を通じて、前者を一旦液化せしめたる上、脈力を減じて、氣化器又は冷藏庫内に入る時、氣化するやうにす。

れいきん 園園園園【名】『園は領管領の領にて、統へくる義。』園は樂、囚徒を領録して、禁繫する義。らうや。ひとや。獄舎。

れいきん 禮義樂【名】じやうやう(五)今の記録數部内より、朝廷の禮法、儀式に關する事項を類聚せるもの。五百十卷、別に序目二卷、圖十六卷。徳川光圀の、學者を彰考館に集めて編纂せしめしもの。書名は、靈元上皇の御覽に供せし際賜はりしものとす。

れいきん 靈區【名】れいち(靈地)に同じ。

れいきん 靈供【名】佛前又は死者の靈前に供ふる齋食(じやく)。

れいきん 麗句【名】詩文の、うるはしき語。

れいきん 麗句【名】つゝく(麗供)に同じ。

れいきん 麗句【名】つゝく(麗供)に同じ。

れいきん 麗句【名】つゝく(麗供)に同じ。

れいきん 麗句【名】つゝく(麗供)に同じ。

れいきん 麗句【名】つゝく(麗供)に同じ。

れいきん 麗句【名】つゝく(麗供)に同じ。

れいきん 麗句【名】つゝく(麗供)に同じ。

れいきん 麗句【名】つゝく(麗供)に同じ。

れいきん 麗句【名】つゝく(麗供)に同じ。

れいきん 麗句【名】つゝく(麗供)に同じ。

れいきん 麗句【名】つゝく(麗供)に同じ。

れいきん 麗句【名】つゝく(麗供)に同じ。

れいきん 麗句【名】つゝく(麗供)に同じ。

禮遇停止【句】華族又は朝鮮貴族たる禮遇を停止すること。心神の喪失又はその耗弱なる者、破産の宣告を受けたる者、勾留狀を執行せられたる者、華族又は貴族たる體面を汚辱する行爲ある者等に對する罰則にして、或期間又は或事項の消滅又は到來する時は、停止を解除せらる。

れいきん 冷遇【名】冷淡に待遇すること、又その待遇。款待せぬこと。薄遇。薄待。冷待。

れいきん 靈窟【名】靈神・靈佛などを安置せる土窟又は石窟。靈室。靈社。靈寺。平室。靈山は、……、佛法繁昌の靈窟として、久しく鎮護國家の道場に備ふ。

れいきん 冷燻法【名】燻製法の一種。鹽氣を強くし、六七十度の溫度にて、二三週間に涉りて燻蒸すること。防腐劑、よく内部に浸潤して、貯藏の目的を完全に達することを得。(燻煙法に對して)

れいきん 靈化【名】『英Spiritualization』靈感によりて、事件・題材に、靈妙なる力を與ふること。

れいきん 例會【名】日を定めて毎月行ふこと。つきなみ。毎月。

れいきん 冷灰【名】火氣失せて冷えた灰。死灰。

れいきん 靈怪【名】不思議に怪しきこと、又そのもの。

れいきん 例外【名】通例以外。規則外。

れいきん 例外法【名】「法」例外の場合なる事項・場所又は人へのみ適用する法令。特別法。(原則法に對して)

れいきん 靈光【名】『尊く不思議なる光。』(佛)人人固有の佛性(ぶつじやう)の、光明を放つもの。

れいきん 靈光門徒【名】(佛)きやうだう(鏡道派)に同じ。

れいきん 靈光【名】『尊く不思議なる光。』(佛)人人固有の佛性(ぶつじやう)の、光明を放つもの。

れいきん 靈光【名】『尊く不思議なる光。』(佛)人人固有の佛性(ぶつじやう)の、光明を放つもの。

れいきん 靈光【名】『尊く不思議なる光。』(佛)人人固有の佛性(ぶつじやう)の、光明を放つもの。

れいきん 靈光【名】『尊く不思議なる光。』(佛)人人固有の佛性(ぶつじやう)の、光明を放つもの。

れいきん 靈光【名】『尊く不思議なる光。』(佛)人人固有の佛性(ぶつじやう)の、光明を放つもの。

れいきん 靈光【名】『尊く不思議なる光。』(佛)人人固有の佛性(ぶつじやう)の、光明を放つもの。

れいきん 靈光【名】『尊く不思議なる光。』(佛)人人固有の佛性(ぶつじやう)の、光明を放つもの。

に「欄菜之食、葵菜之羹」とあり「あかざと豆の羹との羹。れいかう(葵羹)参照。れいゝわん 伶官【名】がくゝわん(樂官)に同じ。『職(温官に對して)』

れいゝわん 冷官【名】役徳の無き官。冷れいゝわん 禮冠【名】らいゝわん(禮冠)を見よ。

れいゝわん 令兄【名】『令はよき義』他人の兄の敬稱。(令弟に對して)『じ。』

れいゝわん 令契【名】れいさい(令妻)に同じ。

れいゝわん 鈴契【名】鈴と關契と。

れいゝわん 麗景殿【名】平安京の大内裡の殿舎の一。綾綺殿の北、宣耀殿の南、承香殿の東北に位し、西、弘徽殿に對し、後宮の一に屬し、皇后・中宮・女御等の御在所に充てられたり。

れいゝわん 冷血【名】體温の外氣よりひやかかること。(温血に對して)『じ。』

れいゝわん 冷血【名】體温の外氣よりひやかかること。(温血に對して)『じ。』

れいゝわん 冷血【名】體温の外氣よりひやかかること。(温血に對して)『じ。』

れいゝわん 冷血【名】體温の外氣よりひやかかること。(温血に對して)『じ。』

れいゝわん 冷血【名】體温の外氣よりひやかかること。(温血に對して)『じ。』

れいゝわん 冷血【名】體温の外氣よりひやかかること。(温血に對して)『じ。』

れいゝわん 冷血【名】體温の外氣よりひやかかること。(温血に對して)『じ。』

れいゝわん 冷血【名】體温の外氣よりひやかかること。(温血に對して)『じ。』

れいゝわん 冷血【名】體温の外氣よりひやかかること。(温血に對して)『じ。』

れいゝわん 冷血【名】體温の外氣よりひやかかること。(温血に對して)『じ。』

れいゝわん 冷血【名】體温の外氣よりひやかかること。(温血に對して)『じ。』

れいゝわん 冷血【名】體温の外氣よりひやかかること。(温血に對して)『じ。』

れいゝわん 冷血【名】體温の外氣よりひやかかること。(温血に對して)『じ。』

「天成麗質難ニ自棄」とあり』生來、清ら

れいじんさう 伶人草〔名〕〔植〕毛茛(モウコン)
科に屬する多年生の草。高さ二三尺乃

れいしゆ 醴酒【名】あまざけ。こざけ。

れいしよく 冷色 【名】 【美】 かんじよく (寒色) に同じ。

れいせい

れいせいよく 冷職(名)れいけい(冷官)に同じ。(温職に對して)

れいせいよ 例叙位(名)『臨時の叙位と區別していふ』(後位)に同じ。

れいせい 命す『勳佐變他』令を下す。命令す。いひつて。命す。

れいせい 隸す『勳佐變自』配下となす。隸屬す。

れいせい 零數(名)『略零のかず。はしれいせい 禮數(名)』左傳の莊公十八年の條に『名位不同、禮亦異數』、唐書の裴耀卿傳に『班爵與公同、而禮數異、何也』とあり。地位に相當する禮儀、待遇。

れいせい 靈水(名)『尊く不可思議なる水。靈驗ある水。』

れいせい 冷水(名)『つめたき水。ひやみづ。』

れいせい 瓶水(名)『いす(瓶水)に同瓶水を建(つ)すが如し(句)』『史記の高祖紀に、其以兵下三諸侯、譬猶居三高屋之上、建瓶水上也』とあり。屋上より瓶(びん)の水をこぼすに似たる義、勢の盛んなる形容。

れいせい 醴水(名)『あまざけと、水と。』『莊子の山木篇に『君子之交、淡如水、小人之交、甘如醴』とあるに本づく』

れいせい 麗水(名)『地』『韓非子の内儲説篇に『荆南之地、麗水之中、生(産)金、千文字に『金生麗水』とあり』支那浙江省にある川。『朝鮮全羅南道の東端に突出せる天然の良港、水陸交通の便ありて、輸出入の繁盛、木浦に亞ぐ。』

れいせい 靈瑞(名)『尊く不可思議なるしるし。祥瑞。』

れいせい まさつ 冷水摩擦(名)『獨(Alrohung)皮膚を強固にし、血液の循環をよくする爲に、冷水に浸せる手拭などにて、全身を摩擦すること。』

れいせい よく 冷水浴(名)『獨(Kit-baden)冷水摩擦と同じ目的にて、起床後などに、冷水に浴すること。』『禮式、れいせい 禮制(名)』禮儀に關する制度。

れいせい

れいせい 令正(名)れいせい(令妻)に同じ。『他人の婦(ひめ)の敬稱。』

れいせい 令婿(名)『令はよき義、れいせい 令生(名)』太政官の雅樂局に、一時置かれて、雅樂を修習せし等外官。れいせい(俗人)参照。

れいせい 冷靜(名)『一時の情に驅られなどせず、おちつきて、靜かなること。』冷靜なる頭腦。』

れいせい 鈴聲(名)『鈴の音。』

れいせい 勵精厲精(名)『精神を勵(も)ます義。』つとめはげむこと。精を出すこと。精厲。』

れいせい 厲聲(名)『聲を張り上げることを和けて發音せるものなること、紫宸殿をしいてんと呼ぶ類。』

れいせい 冷泉(名)『泉の字の音はせんなるを和けて發音せるものなること、紫宸殿をしいてんと呼ぶ類。』

れいせい 冷泉(名)『泉の字の音はせんなるを和けて發音せるものなること、紫宸殿をしいてんと呼ぶ類。』

れいせい 冷泉(名)『泉の字の音はせんなるを和けて發音せるものなること、紫宸殿をしいてんと呼ぶ類。』

れいせい 冷泉(名)『泉の字の音はせんなるを和けて發音せるものなること、紫宸殿をしいてんと呼ぶ類。』

れいせい 冷泉(名)『泉の字の音はせんなるを和けて發音せるものなること、紫宸殿をしいてんと呼ぶ類。』

れいせい 冷泉(名)『泉の字の音はせんなるを和けて發音せるものなること、紫宸殿をしいてんと呼ぶ類。』

れいせい 冷泉(名)『泉の字の音はせんなるを和けて發音せるものなること、紫宸殿をしいてんと呼ぶ類。』

れいせい 冷泉(名)『泉の字の音はせんなるを和けて發音せるものなること、紫宸殿をしいてんと呼ぶ類。』

れいせい 冷泉(名)『泉の字の音はせんなるを和けて發音せるものなること、紫宸殿をしいてんと呼ぶ類。』

れいせい 冷泉(名)『泉の字の音はせんなるを和けて發音せるものなること、紫宸殿をしいてんと呼ぶ類。』

れいせい 冷泉(名)『泉の字の音はせんなるを和けて發音せるものなること、紫宸殿をしいてんと呼ぶ類。』

れいせい 冷泉(名)『泉の字の音はせんなるを和けて發音せるものなること、紫宸殿をしいてんと呼ぶ類。』

れいせい 冷泉(名)『泉の字の音はせんなるを和けて發音せるものなること、紫宸殿をしいてんと呼ぶ類。』

れいせい 冷泉(名)『泉の字の音はせんなるを和けて發音せるものなること、紫宸殿をしいてんと呼ぶ類。』

れいせい

れいせい ためもり 冷泉爲守(名)『人』歌人。從二位。爲教の男。新後拾遺集新續古今集の作家。藤原爲守と云ふ。

れいせい 冷泉天皇(名)『人』

れいせい 冷泉院(名)『見よ』第六十三代の天皇。御名は憲平(ひさひら)。村上天皇第二の皇子。御母は贈皇太后藤原安子。御在位二年(紀元一六二八年)一六二九年。寛弘八年崩す。壽六十二。

れいせい 冷泉院(名)『見よ』第六十三代の天皇。御名は憲平(ひさひら)。村上天皇第二の皇子。御母は贈皇太后藤原安子。御在位二年(紀元一六二八年)一六二九年。寛弘八年崩す。壽六十二。

れいせい 冷泉院(名)『見よ』第六十三代の天皇。御名は憲平(ひさひら)。村上天皇第二の皇子。御母は贈皇太后藤原安子。御在位二年(紀元一六二八年)一六二九年。寛弘八年崩す。壽六十二。

れいせい 冷泉院(名)『見よ』第六十三代の天皇。御名は憲平(ひさひら)。村上天皇第二の皇子。御母は贈皇太后藤原安子。御在位二年(紀元一六二八年)一六二九年。寛弘八年崩す。壽六十二。

れいせい 冷泉院(名)『見よ』第六十三代の天皇。御名は憲平(ひさひら)。村上天皇第二の皇子。御母は贈皇太后藤原安子。御在位二年(紀元一六二八年)一六二九年。寛弘八年崩す。壽六十二。

れいせい 冷泉院(名)『見よ』第六十三代の天皇。御名は憲平(ひさひら)。村上天皇第二の皇子。御母は贈皇太后藤原安子。御在位二年(紀元一六二八年)一六二九年。寛弘八年崩す。壽六十二。

れいせい 冷泉院(名)『見よ』第六十三代の天皇。御名は憲平(ひさひら)。村上天皇第二の皇子。御母は贈皇太后藤原安子。御在位二年(紀元一六二八年)一六二九年。寛弘八年崩す。壽六十二。

れいせい 冷泉院(名)『見よ』第六十三代の天皇。御名は憲平(ひさひら)。村上天皇第二の皇子。御母は贈皇太后藤原安子。御在位二年(紀元一六二八年)一六二九年。寛弘八年崩す。壽六十二。

れいせい 冷泉院(名)『見よ』第六十三代の天皇。御名は憲平(ひさひら)。村上天皇第二の皇子。御母は贈皇太后藤原安子。御在位二年(紀元一六二八年)一六二九年。寛弘八年崩す。壽六十二。

れいせい 冷泉院(名)『見よ』第六十三代の天皇。御名は憲平(ひさひら)。村上天皇第二の皇子。御母は贈皇太后藤原安子。御在位二年(紀元一六二八年)一六二九年。寛弘八年崩す。壽六十二。

れいせい 冷泉院(名)『見よ』第六十三代の天皇。御名は憲平(ひさひら)。村上天皇第二の皇子。御母は贈皇太后藤原安子。御在位二年(紀元一六二八年)一六二九年。寛弘八年崩す。壽六十二。

れいせい 冷泉院(名)『見よ』第六十三代の天皇。御名は憲平(ひさひら)。村上天皇第二の皇子。御母は贈皇太后藤原安子。御在位二年(紀元一六二八年)一六二九年。寛弘八年崩す。壽六十二。

れいせい 冷泉院(名)『見よ』第六十三代の天皇。御名は憲平(ひさひら)。村上天皇第二の皇子。御母は贈皇太后藤原安子。御在位二年(紀元一六二八年)一六二九年。寛弘八年崩す。壽六十二。

れいせい 冷泉院(名)『見よ』第六十三代の天皇。御名は憲平(ひさひら)。村上天皇第二の皇子。御母は贈皇太后藤原安子。御在位二年(紀元一六二八年)一六二九年。寛弘八年崩す。壽六十二。

れいせい 冷泉院(名)『見よ』第六十三代の天皇。御名は憲平(ひさひら)。村上天皇第二の皇子。御母は贈皇太后藤原安子。御在位二年(紀元一六二八年)一六二九年。寛弘八年崩す。壽六十二。

れいせい 冷泉院(名)『見よ』第六十三代の天皇。御名は憲平(ひさひら)。村上天皇第二の皇子。御母は贈皇太后藤原安子。御在位二年(紀元一六二八年)一六二九年。寛弘八年崩す。壽六十二。

れいせい 冷泉院(名)『見よ』第六十三代の天皇。御名は憲平(ひさひら)。村上天皇第二の皇子。御母は贈皇太后藤原安子。御在位二年(紀元一六二八年)一六二九年。寛弘八年崩す。壽六十二。

れいせい 冷泉院(名)『見よ』第六十三代の天皇。御名は憲平(ひさひら)。村上天皇第二の皇子。御母は贈皇太后藤原安子。御在位二年(紀元一六二八年)一六二九年。寛弘八年崩す。壽六十二。

れいせい

れいせい 冷泉院(名)『見よ』第六十三代の天皇。御名は憲平(ひさひら)。村上天皇第二の皇子。御母は贈皇太后藤原安子。御在位二年(紀元一六二八年)一六二九年。寛弘八年崩す。壽六十二。

れいせい 冷泉院(名)『見よ』第六十三代の天皇。御名は憲平(ひさひら)。村上天皇第二の皇子。御母は贈皇太后藤原安子。御在位二年(紀元一六二八年)一六二九年。寛弘八年崩す。壽六十二。

れいせい 冷泉院(名)『見よ』第六十三代の天皇。御名は憲平(ひさひら)。村上天皇第二の皇子。御母は贈皇太后藤原安子。御在位二年(紀元一六二八年)一六二九年。寛弘八年崩す。壽六十二。

れいせい 冷泉院(名)『見よ』第六十三代の天皇。御名は憲平(ひさひら)。村上天皇第二の皇子。御母は贈皇太后藤原安子。御在位二年(紀元一六二八年)一六二九年。寛弘八年崩す。壽六十二。

れいせい 冷泉院(名)『見よ』第六十三代の天皇。御名は憲平(ひさひら)。村上天皇第二の皇子。御母は贈皇太后藤原安子。御在位二年(紀元一六二八年)一六二九年。寛弘八年崩す。壽六十二。

れいせい 冷泉院(名)『見よ』第六十三代の天皇。御名は憲平(ひさひら)。村上天皇第二の皇子。御母は贈皇太后藤原安子。御在位二年(紀元一六二八年)一六二九年。寛弘八年崩す。壽六十二。

れいせい 冷泉院(名)『見よ』第六十三代の天皇。御名は憲平(ひさひら)。村上天皇第二の皇子。御母は贈皇太后藤原安子。御在位二年(紀元一六二八年)一六二九年。寛弘八年崩す。壽六十二。

れいせい 冷泉院(名)『見よ』第六十三代の天皇。御名は憲平(ひさひら)。村上天皇第二の皇子。御母は贈皇太后藤原安子。御在位二年(紀元一六二八年)一六二九年。寛弘八年崩す。壽六十二。

れいせい 冷泉院(名)『見よ』第六十三代の天皇。御名は憲平(ひさひら)。村上天皇第二の皇子。御母は贈皇太后藤原安子。御在位二年(紀元一六二八年)一六二九年。寛弘八年崩す。壽六十二。

れいせい 冷泉院(名)『見よ』第六十三代の天皇。御名は憲平(ひさひら)。村上天皇第二の皇子。御母は贈皇太后藤原安子。御在位二年(紀元一六二八年)一六二九年。寛弘八年崩す。壽六十二。

れいせい 冷泉院(名)『見よ』第六十三代の天皇。御名は憲平(ひさひら)。村上天皇第二の皇子。御母は贈皇太后藤原安子。御在位二年(紀元一六二八年)一六二九年。寛弘八年崩す。壽六十二。

れいせい 冷泉院(名)『見よ』第六十三代の天皇。御名は憲平(ひさひら)。村上天皇第二の皇子。御母は贈皇太后藤原安子。御在位二年(紀元一六二八年)一六二九年。寛弘八年崩す。壽六十二。

れいせい 冷泉院(名)『見よ』第六十三代の天皇。御名は憲平(ひさひら)。村上天皇第二の皇子。御母は贈皇太后藤原安子。御在位二年(紀元一六二八年)一六二九年。寛弘八年崩す。壽六十二。

れいせい 冷泉院(名)『見よ』第六十三代の天皇。御名は憲平(ひさひら)。村上天皇第二の皇子。御母は贈皇太后藤原安子。御在位二年(紀元一六二八年)一六二九年。寛弘八年崩す。壽六十二。

れいせい 冷泉院(名)『見よ』第六十三代の天皇。御名は憲平(ひさひら)。村上天皇第二の皇子。御母は贈皇太后藤原安子。御在位二年(紀元一六二八年)一六二九年。寛弘八年崩す。壽六十二。

れいせい 冷泉院(名)『見よ』第六十三代の天皇。御名は憲平(ひさひら)。村上天皇第二の皇子。御母は贈皇太后藤原安子。御在位二年(紀元一六二八年)一六二九年。寛弘八年崩す。壽六十二。

れいせい 冷泉院(名)『見よ』第六十三代の天皇。御名は憲平(ひさひら)。村上天皇第二の皇子。御母は贈皇太后藤原安子。御在位二年(紀元一六二八年)一六二九年。寛弘八年崩す。壽六十二。

れいせい 冷泉院(名)『見よ』第六十三代の天皇。御名は憲平(ひさひら)。村上天皇第二の皇子。御母は贈皇太后藤原安子。御在位二年(紀元一六二八年)一六二九年。寛弘八年崩す。壽六十二。

れいせい 冷泉院(名)『見よ』第六十三代の天皇。御名は憲平(ひさひら)。村上天皇第二の皇子。御母は贈皇太后藤原安子。御在位二年(紀元一六二八年)一六二九年。寛弘八年崩す。壽六十二。

れいせい 冷泉院(名)『見よ』第六十三代の天皇。御名は憲平(ひさひら)。村上天皇第二の皇子。御母は贈皇太后藤原安子。御在位二年(紀元一六二八年)一六二九年。寛弘八年崩す。壽六十二。

の孫の敬稱。
れいそん 令尊【名】『令はよき義』れい

こと。一説、れいたん(冷淡)の音便なりと。「古語」枕「みづから持(モ)てまうて

いぢやう令嬢令娘〔名〕他人の娘の敬稱。令愛。(令息に對して)

【名】①試験にて、少しも

ふねわ

れいぞう

計に於ける水點。」「と。篆隸。
 れいぞう 隸篆、隸篆【名】隸書と篆書
 れいぞう 燈等【名】れいてん(燈等具)に同じ。
 れいぞう 靈殿【名】れいだう(靈堂)に同じ。
 れいぞう 零點下【名】れいか(零下)に同じ。
 れいぞう 靈等具、靈天具【名】『靈等具』の字の宋音。明治の初年頃まで、金銀などの貴重品の重さを精密に秤るに用ひし、構造精巧なる秤。桿は黒檀・紫檀又は象牙にて造りたり。れいてん。れてん。りんだめ。りんばかり。

れいぞう 零點下【名】れいか(零下)に同じ。
 れいぞう 靈等具、靈天具【名】『靈等具』の字の宋音。明治の初年頃まで、金銀などの貴重品の重さを精密に秤るに用ひし、構造精巧なる秤。桿は黒檀・紫檀又は象牙にて造りたり。れいてん。れてん。りんだめ。りんばかり。

れいぞう 零點下【名】れいか(零下)に同じ。
 れいぞう 靈等具、靈天具【名】『靈等具』の字の宋音。明治の初年頃まで、金銀などの貴重品の重さを精密に秤るに用ひし、構造精巧なる秤。桿は黒檀・紫檀又は象牙にて造りたり。れいてん。れてん。りんだめ。りんばかり。

れいぞう 零點下【名】れいか(零下)に同じ。
 れいぞう 靈等具、靈天具【名】『靈等具』の字の宋音。明治の初年頃まで、金銀などの貴重品の重さを精密に秤るに用ひし、構造精巧なる秤。桿は黒檀・紫檀又は象牙にて造りたり。れいてん。れてん。りんだめ。りんばかり。

れいぞう 零點下【名】れいか(零下)に同じ。
 れいぞう 靈等具、靈天具【名】『靈等具』の字の宋音。明治の初年頃まで、金銀などの貴重品の重さを精密に秤るに用ひし、構造精巧なる秤。桿は黒檀・紫檀又は象牙にて造りたり。れいてん。れてん。りんだめ。りんばかり。

れいぞう 零點下【名】れいか(零下)に同じ。
 れいぞう 靈等具、靈天具【名】『靈等具』の字の宋音。明治の初年頃まで、金銀などの貴重品の重さを精密に秤るに用ひし、構造精巧なる秤。桿は黒檀・紫檀又は象牙にて造りたり。れいてん。れてん。りんだめ。りんばかり。

れいぞう

冷暖自知、大日經の疏に「如二飲冷水者冷熱自知」とあり。水の冷暖の眞味は、これを飲用せる者の自ら知れるに止まりて、他に傳へ説くことは不可能なること。開悟の眞境は、その境に達したる人自身の知れるに止まりて、他に傳へ説くこと不可能なる覺。
 れいぞう 靈肉【名】『英 Fresh and spirit』靈魂と肉體と。
 れいぞう 靈肉一致【句】精神も、肉體も、高下の別ある二元のものに非ずとする見解。西洋にて、この見解は、希臘思潮の中にも認め得るものがあるに、肉體は罪惡の巢窟、天國は精神の中にあるのみありとの基督の思想が世人を支配すること約一千年に及びしが、文藝復興と同時に、又この見解の復活を見るに至れり。

れいぞう 靈肉【名】『英 Fresh and spirit』靈魂と肉體と。
 れいぞう 靈肉一致【句】精神も、肉體も、高下の別ある二元のものに非ずとする見解。西洋にて、この見解は、希臘思潮の中にも認め得るものがあるに、肉體は罪惡の巢窟、天國は精神の中にあるのみありとの基督の思想が世人を支配すること約一千年に及びしが、文藝復興と同時に、又この見解の復活を見るに至れり。

れいぞう 靈肉【名】『英 Fresh and spirit』靈魂と肉體と。
 れいぞう 靈肉一致【句】精神も、肉體も、高下の別ある二元のものに非ずとする見解。西洋にて、この見解は、希臘思潮の中にも認め得るものがあるに、肉體は罪惡の巢窟、天國は精神の中にあるのみありとの基督の思想が世人を支配すること約一千年に及びしが、文藝復興と同時に、又この見解の復活を見るに至れり。

れいぞう 靈肉【名】『英 Fresh and spirit』靈魂と肉體と。
 れいぞう 靈肉一致【句】精神も、肉體も、高下の別ある二元のものに非ずとする見解。西洋にて、この見解は、希臘思潮の中にも認め得るものがあるに、肉體は罪惡の巢窟、天國は精神の中にあるのみありとの基督の思想が世人を支配すること約一千年に及びしが、文藝復興と同時に、又この見解の復活を見るに至れり。

れいぞう 靈肉【名】『英 Fresh and spirit』靈魂と肉體と。
 れいぞう 靈肉一致【句】精神も、肉體も、高下の別ある二元のものに非ずとする見解。西洋にて、この見解は、希臘思潮の中にも認め得るものがあるに、肉體は罪惡の巢窟、天國は精神の中にあるのみありとの基督の思想が世人を支配すること約一千年に及びしが、文藝復興と同時に、又この見解の復活を見るに至れり。

れいぞう 靈肉【名】『英 Fresh and spirit』靈魂と肉體と。
 れいぞう 靈肉一致【句】精神も、肉體も、高下の別ある二元のものに非ずとする見解。西洋にて、この見解は、希臘思潮の中にも認め得るものがあるに、肉體は罪惡の巢窟、天國は精神の中にあるのみありとの基督の思想が世人を支配すること約一千年に及びしが、文藝復興と同時に、又この見解の復活を見るに至れり。

れいぞう

れいぞう 禮拜【名】禮法を具へて拜むこと。らいはい。拜禮。
 れいぞう 零敗【名】少しの得點を得ずに敗るること。全く負けること。全敗。
 れいぞう 禮拜寺【名】支那に於ける回教の寺院。規模及び外部の形式は、殆ど純然たる支那建築なれども、堂内の設備は、すべて教義に依れり。清真寺。
 れいぞう 禮拜堂【名】清眞寺など、宗教上の客體を祀りて、禮拜に備へたる堂。らいはいだう。

れいぞう 靈寶【名】尊く不可思議なる寶物(たから)。れいほう(靈寶)参照。『靈寶』の神器……我朝神代の靈寶」
 れいぞう 禮砲【名】天皇旗、皇后旗、皇太子旗、皇族旗、文武官又は外國の皇帝・皇族・皇族領、及び大使・公使領事等の外國官吏に對して、敬禮の意を表はすために、軍艦砲臺などより發射する空砲。發射回数は、陸軍にては百〇一發を最高とし、海軍にては二十一發を最高とし、以下差等あり。

れいぞう 禮帽【名】禮服を着る時に用ふる帽子。
 れいぞう 禮貌【名】禮儀正しき風貌。
 れいぞう 禮望【名】よき人望。「式」
 れいぞう 禮法【名】禮の作法。禮儀。禮
 れいぞう 禮飯【名】ひやめし(冷飯)に同じ。『禮飯』
 れいぞう 禮飯【名】ひやめし(冷飯)に同じ。『禮飯』

れいぞう 禮飯【名】ひやめし(冷飯)に同じ。『禮飯』
 れいぞう 禮飯【名】ひやめし(冷飯)に同じ。『禮飯』
 れいぞう 禮飯【名】ひやめし(冷飯)に同じ。『禮飯』
 れいぞう 禮飯【名】ひやめし(冷飯)に同じ。『禮飯』

れいぞう 禮飯【名】ひやめし(冷飯)に同じ。『禮飯』
 れいぞう 禮飯【名】ひやめし(冷飯)に同じ。『禮飯』
 れいぞう 禮飯【名】ひやめし(冷飯)に同じ。『禮飯』
 れいぞう 禮飯【名】ひやめし(冷飯)に同じ。『禮飯』

れいぞう 禮飯【名】ひやめし(冷飯)に同じ。『禮飯』
 れいぞう 禮飯【名】ひやめし(冷飯)に同じ。『禮飯』
 れいぞう 禮飯【名】ひやめし(冷飯)に同じ。『禮飯』
 れいぞう 禮飯【名】ひやめし(冷飯)に同じ。『禮飯』

れいぞう

れいぞう 護符【名】『護符』
 (北斗尊星傳に同じ。『道術家の語』)
 徳川時代、大阪の天満宮(神社の東にありし、娼婦の集居の俗稱。今は僅かに數戸の待合茶屋ありて、社内悉く順拜し、靈符の女の眞白き顔も、横目に見なし)の靈符。
 れいぞう 令扶【名】家令と家扶と。
 れいぞう 禮部【名】支那にて、六部分の一。典禮・風教・學校等に關する事を總轄せし所。れいほう。
 れいぞう 禮部【名】支那にて、六部分の一。典禮・風教・學校等に關する事を總轄せし所。れいほう。

れいぞう 禮部【名】支那にて、六部分の一。典禮・風教・學校等に關する事を總轄せし所。れいほう。
 れいぞう 禮部【名】支那にて、六部分の一。典禮・風教・學校等に關する事を總轄せし所。れいほう。
 れいぞう 禮部【名】支那にて、六部分の一。典禮・風教・學校等に關する事を總轄せし所。れいほう。
 れいぞう 禮部【名】支那にて、六部分の一。典禮・風教・學校等に關する事を總轄せし所。れいほう。

れいぞう 禮部【名】支那にて、六部分の一。典禮・風教・學校等に關する事を總轄せし所。れいほう。
 れいぞう 禮部【名】支那にて、六部分の一。典禮・風教・學校等に關する事を總轄せし所。れいほう。
 れいぞう 禮部【名】支那にて、六部分の一。典禮・風教・學校等に關する事を總轄せし所。れいほう。
 れいぞう 禮部【名】支那にて、六部分の一。典禮・風教・學校等に關する事を總轄せし所。れいほう。

れいぞう 禮部【名】支那にて、六部分の一。典禮・風教・學校等に關する事を總轄せし所。れいほう。
 れいぞう 禮部【名】支那にて、六部分の一。典禮・風教・學校等に關する事を總轄せし所。れいほう。
 れいぞう 禮部【名】支那にて、六部分の一。典禮・風教・學校等に關する事を總轄せし所。れいほう。
 れいぞう 禮部【名】支那にて、六部分の一。典禮・風教・學校等に關する事を總轄せし所。れいほう。

れいぞう 禮部【名】支那にて、六部分の一。典禮・風教・學校等に關する事を總轄せし所。れいほう。
 れいぞう 禮部【名】支那にて、六部分の一。典禮・風教・學校等に關する事を總轄せし所。れいほう。
 れいぞう 禮部【名】支那にて、六部分の一。典禮・風教・學校等に關する事を總轄せし所。れいほう。
 れいぞう 禮部【名】支那にて、六部分の一。典禮・風教・學校等に關する事を總轄せし所。れいほう。

れいぞう 禮部【名】支那にて、六部分の一。典禮・風教・學校等に關する事を總轄せし所。れいほう。
 れいぞう 禮部【名】支那にて、六部分の一。典禮・風教・學校等に關する事を總轄せし所。れいほう。
 れいぞう 禮部【名】支那にて、六部分の一。典禮・風教・學校等に關する事を總轄せし所。れいほう。
 れいぞう 禮部【名】支那にて、六部分の一。典禮・風教・學校等に關する事を總轄せし所。れいほう。

れいぶつ 禮物 [名] ①「書經の微子之命篇に「統承先王、修其禮物」とあり」典

れいぶみ 禮文 [名] ①「れいじやう(禮狀)に同じ。根拠なき後日に、禮ぶみを遣りける

れいぶん 例文 [名] 例として掲ぐる文

れいぶん 令聞 [名] ①「よき評判。ほまれ

れいへい 例幣 [名] ①「朝廷よりの、例年の

れいへい 禮幣 [名] ①「禮を具へて呼び迎

れいへい 例幣使 [名] ①「例幣のために

れいへい 例幣使街道 [名] ①「上野國より下野國に互り、徳川時代

れいへい 例幣使の通過せし街道。上野國

れいへい 例幣使の通過せし街道。上野國

れいへい 例幣使の通過せし街道。上野國

れいへい 例幣使の通過せし街道。上野國

れいへい 例幣使の通過せし街道。上野國

れいへい 例幣使の通過せし街道。上野國

れいへい 例幣使の通過せし街道。上野國

れいへい 例幣使の通過せし街道。上野國

れいへい 例幣使の通過せし街道。上野國

れいへい 例幣使の通過せし街道。上野國

れいへい 例幣使の通過せし街道。上野國

れいへい 例幣使の通過せし街道。上野國

れいへい 例幣使の通過せし街道。上野國

れいへい 例幣使の通過せし街道。上野國

れいほう 禮部 [名] ①「りほう(吏部)を見

れいほう 禮奉公 [名] 奉公人が、年

れいほう 禮奉公 [名] 奉公人が、年

れいほう 禮奉公 [名] 奉公人が、年

れいほう 禮奉公 [名] 奉公人が、年

れいほう 禮奉公 [名] 奉公人が、年

れいほう 禮奉公 [名] 奉公人が、年

れいほう 禮奉公 [名] 奉公人が、年

れいほう 禮奉公 [名] 奉公人が、年

れいほう 禮奉公 [名] 奉公人が、年

れいほう 禮奉公 [名] 奉公人が、年

れいほう 禮奉公 [名] 奉公人が、年

れいほう 禮奉公 [名] 奉公人が、年

れいほう 禮奉公 [名] 奉公人が、年

れいほう 禮奉公 [名] 奉公人が、年

れいほう 禮奉公 [名] 奉公人が、年

れいほう 禮奉公 [名] 奉公人が、年

れいほう 禮奉公 [名] 奉公人が、年

れいほう 禮奉公 [名] 奉公人が、年

れいほう 禮奉公 [名] 奉公人が、年

れいほう 禮奉公 [名] 奉公人が、年

れいほう 禮奉公 [名] 奉公人が、年

れいもつ 靈物 [名] ①「れいぶつ(靈物)に同

れいもつ 靈物 [名] ①「れいぶつ(靈物)に同

れいもつ 靈物 [名] ①「れいぶつ(靈物)に同

れいもつ 靈物 [名] ①「れいぶつ(靈物)に同

れいもつ 靈物 [名] ①「れいぶつ(靈物)に同

れいもつ 靈物 [名] ①「れいぶつ(靈物)に同

れいもつ 靈物 [名] ①「れいぶつ(靈物)に同

れいもつ 靈物 [名] ①「れいぶつ(靈物)に同

れいもつ 靈物 [名] ①「れいぶつ(靈物)に同

れいもつ 靈物 [名] ①「れいぶつ(靈物)に同

れいもつ 靈物 [名] ①「れいぶつ(靈物)に同

れいもつ 靈物 [名] ①「れいぶつ(靈物)に同

れいもつ 靈物 [名] ①「れいぶつ(靈物)に同

れいもつ 靈物 [名] ①「れいぶつ(靈物)に同

れいもつ 靈物 [名] ①「れいぶつ(靈物)に同

れいもつ 靈物 [名] ①「れいぶつ(靈物)に同

れいもつ 靈物 [名] ①「れいぶつ(靈物)に同

れいもつ 靈物 [名] ①「れいぶつ(靈物)に同

れいもつ 靈物 [名] ①「れいぶつ(靈物)に同

れいもつ 靈物 [名] ①「れいぶつ(靈物)に同

れいもつ 靈物 [名] ①「れいぶつ(靈物)に同

れいもつ 靈物 [名] ①「れいぶつ(靈物)に同

れいりん 伶倫 [名] ①「人」倫は名な

れいりん 伶倫 [名] ①「人」倫は名な

れいりん 伶倫 [名] ①「人」倫は名な

れいりん 伶倫 [名] ①「人」倫は名な

れいりん 伶倫 [名] ①「人」倫は名な

れいりん 伶倫 [名] ①「人」倫は名な

れいりん 伶倫 [名] ①「人」倫は名な

れいりん 伶倫 [名] ①「人」倫は名な

れいりん 伶倫 [名] ①「人」倫は名な

れいりん 伶倫 [名] ①「人」倫は名な

れいりん 伶倫 [名] ①「人」倫は名な

れいりん 伶倫 [名] ①「人」倫は名な

れいりん 伶倫 [名] ①「人」倫は名な

れいりん 伶倫 [名] ①「人」倫は名な

れいりん 伶倫 [名] ①「人」倫は名な

れいりん 伶倫 [名] ①「人」倫は名な

れいりん 伶倫 [名] ①「人」倫は名な

れいりん 伶倫 [名] ①「人」倫は名な

れいりん 伶倫 [名] ①「人」倫は名な

れいりん 伶倫 [名] ①「人」倫は名な

れいりん 伶倫 [名] ①「人」倫は名な

れいりん 伶倫 [名] ①「人」倫は名な

れいめん

よ』太政官の雅樂局に置かれ、一旦廢止の後、又、式部寮に置かれ職員。雅樂局にては、伶生の下に立ち、式部寮にては、等外吏として、雅樂の事に服務する職となり、後、一等より四等までに分たれしが、明治十七年、式部寮の廢止と共に廢せられたり。

「卿。

れいおん 令尹 【名】支那周の楚國の上
れいゑん 嶺猿 【名】嶺に棲める猿。
れいをく 靈屋 【名】祖先の靈を祀れる

れう 寮^{リウ}〔名〕■王朝時代に、司と共に、省の被官として官署の稱呼。例へば、中務(なかむ)の寮、左右大舍人(みぎひだり)の寮、圖書寮、内藏^{ないざう}の寮、縫殿寮、陰陽寮、式部省の大學生、散位寮など。調讀^{てうりやう}して「つかさどる」といひ、四部寮は、頭^{かみ}、助^{すけ}、允^{のり}、典^{のり}、郎^{らう}と書けり。■學校・寺院などにて、學生等の寄宿する所。學寮。寄宿舎。ちやれちやれ寮の略。四ひかへていもやしき。別荘。娼妓館、其輪^{きりん}の寮として、人も知り、あたりに目立ひ一様は、新町^{しんまち}の女郎屋、梶屋治衛門が別業なり」

寮の馬【句】古左右馬寮(マ)に飼養せし馬。平家寮の御馬(マ)に、四手(デ)附けて、數十匹引き立てらる」

れう料〔名〕①用ふべき物。役に立つる品。しろ。材料。源氏御誦經(わがみ)せきま
せたまへとて、そのれうの物、文(ふみ)などき
書き添へて持(も)て來たり」宇治その料
の紙は、いまだあるらん」②ため。源氏
「初の日は先帝の御れう、次の日は母后の

れう 綾〔名〕『綾の字の音、正しくはリョウ』あや(綾)〔目〕に同じ。『古語』 苙れうの表袴(へか)……など、いみじう鮮かにて」

れういろ

十年（我國の紀元一五七六年——一七八五年）にして、金に滅ぼさる。滅後一族なる耶律大石は、西に走り、中央亞細亞に西遼國を建て、四世（一七八八年（紀元一七八四年）——一八七一年）に及べり。

れうという僚友（名）あひやく、同役、同僚。僚輩。

れう^一か 寮歌「名」學校に校歌あると同様に、學寮、又、寄宿舎のために作りて、寮生・寄宿生のうたふ歌。

れうかい遼海〔名〕廣廣とはるかなる
「請暇・病暇・寮暇・暫暇僧衆」
請ひて、寮内に休止すること。庭訓往來

れうかい 了海〔名〕鏊の形的一種。
れうかい 了解〔名〕さること。合點。

會得。理會。領解。了得。了覺。了悟。
れう。かく。了覺。〔名〕前條に同じ。
れう。かん。僚艦。〔名〕仲間の軍艦。同じ任

務に就きてある軍艦。
れうかん 料簡〔名〕料(か)り簡(かん)ぶこ
と。れうけん(料簡)参照。

れうき「了義」〔名〕「佛」究竟(マウ)の實義を、明らかに顯はすこと。

れうき「綾綺殿」〔名〕りようきてん(綾

綺殿)に同じ。
れうきん 料金〔名〕**㊦**他より利益を受けたるに對して支拂ふ金銭。料。**㊦**〔法〕

營造物の使用料。
れうぎやく料脚〔名〕れうそく(料足)を
見よ』ぜに(錢)に同じ。

れうくわ 蓼花〔名〕たでの花。
れうくわ 燎火〔名〕にはび(庭火)に同じ。
れうくわく 寥廓〔名〕『次條の語の轉義』そら。虚空(ゆゑ)。

和らぐ^{わやぐ}わく^{わく} 寥^{れう}廓^{くわく}【寥】^{れう}は空虚にき
びしき義、廓は開けて大いなる義」ほが
らかに廣きさま。

吏。官僚。①同役の官使。同役。
れうけん 料簡〔名〕①「佛」『料ははか

わぢらん

別する意。安樂集記の卷上に「料簡之旨、
義簡はえらふ即ち義理を最表す」と
ある。今家標章猶名三料簡。和尚
人師不同。總以三解釋、皆名三料簡。天台唯周二問答。
總以三解釋、皆名三料簡。天台唯周二問答。
名三料簡也」とあり。れうかん(料簡)参照
教義の解釋。天台宗にては、教義の問答。
日考(量ること。思慮。分別。「了簡料

見了見」太平記「文字についで、御料簡あるに」目こらへて許すこと。勘辨。宥恕。「了簡料見了見」武家義理物語「了簡して、一命を助くべし」胸算用、そこを了

簡し給ひて」
 如うげん 寮元〔名〕「佛」禪寺にて、衆寮
 の雑務、即ち經文什器・茶湯・柴炭・請給・供
 需・洒掃・浣濯等の事を總掌する役。西序

の下に班列す。上記の諸事を分掌する者に寮長あり、別に、寮元の下に寮主・副寮ありて、これを輔佐す。寮首座(レウシ)。

北うげん 燎原〔名〕『次條を見よ』火が、
向ひ近づくべからざる勢を以て、野原に
燃ゆること。太平記「燐火不消、忽起、燎

原之烟燂ニ
燎原の勢【句】『書經の盤庚篇に「若
火之燎于原、不可ニ禡ニ遏、其猶ニ可ニ撲ニ』

源二とあり』向ひ近づくへからざる程の勢。

了見勝「名」我慢つよきこと。勘忍つよきこと。世間手代氣質「日頃料見勝なる人

れうけん・ちがひ 料簡違・了簡違・料見違
了見違〔名〕心の持方の、正しき道に外
れてあること。

▲

「佐」を見よ。「一代男」「佐極(きん)の手鑑
運び」

材料【名】建築の料とする材

木。料木。盛養弘天平十七年に土木の造
縁を始められしに、……牛來つて、料材を
運び」

聊齋志異【名】「書」怪談。四百四十六篇を記せるもの。十六卷。支那清の柳泉居士蒲松齡の著。著想・文章、他の怪談本に比して、一頭地を拔けり。

如うさつ 瞭察〔名〕明らかに察すること。
と。見抜くこと。明察。

なさんとて」
北うし寮試【名】王朝時代に、大學寮に
て、學生を試験せしこと。及第したる者

を、擬文章生(ウギモンシヤ)に補したり。源氏(今
は、寮試受けさせんとて、まづ、わが御前
にて試みさせたまふ、一

跡を記せるもの。二十一史の一。百十六卷(本紀三十卷、志三十三卷、表八卷、列傳

を奉じて、宋・金兩史と併せ撰びしもの。
 四十五卷。元の托克拓魯が元の順帝の命
 〔名〕『次條の語の轉義』輕

輕しき振舞。寵忽。一代男、斷なしに腹の上に乗りかかれ、下より胸をおさへて「これは聊爾なさるといふ」

れうじ 聊爾【貌】『聊はいささか・假初
(ソリ)・姑くなどの義』そつじ(卒爾)に同じ
盛衰記 相承聊爾ならず、血脈・法機を定

る」狂言名取川「渡りつけぬ川を、聊爾
渡らうものではない」
れうしーぼこ 料紙箱〔名〕■料紙を入
おく箱。大き一尺四方、深さは、蓋とも二
寸五分、蓋は合口（フタ）黒漆塗にて、時給

を施し、合口に錫縁を入れ、廚子棚には、その右方に飾る。同類のものに、なほ、色紙(シテ)箱、裏紙箱、短冊箱などありたり。

「語」次條に同じ。(比較的文典に對して)
れきしじやう 曆象(名)「書經の堯典篇に「曆三象日月星辰」とあり」曆によりて、日月星辰の運行を推算すること、又その運行、天文。「(曆)に同じ」

れきしじやう 曆樹(名)「植」くぬぎれきしじやう 曆術(名)日月星辰の運行を測りて曆を作る術。
れきしじやう 曆書(名)「曆」に關する書。曆本。

れきしじやう 曆數(名)「書經の洪範篇に「五日曆數」とあり。曆運の數の義。定數ありて、運行盈虧するより、數といふ。日月星辰の運行、盈虧、曆の中の四時、氣節。論語の堯曰篇に「堯曰、咨爾舜、天之曆數、在爾躬」とあり。曆の中の四時、氣節に先後の次第あるが如く、正統記「堯不令」の堯、八十三萬餘年ましましに、その御弟舜(堯)の尊の御世より、俄かに人皇の代となりて、曆數も短くなりける事、疑ふ人もあるべきにや」目天皇に代りて、天下の政治を執る者の、代相繼ぐこと。太平記平氏、世を執つて九代、曆數、已に百六十餘年」

れきしじやう 曆世(名)「れきたい(歴代)に同じ」
れきしじやう 曆生(名)古、陰陽の察に屬して、曆術を學びし學生。「同じ」
れきしじやう 曆正(名)「れきくわん(曆官)に同じ」
れきしじやう 瀝青(名)「化」英 Bitumen」有機性なる一種の物質。即ち「ちゃん」など。

れきしじやう 瀝青石(名)「英」Pitch stone」暗綠色、黑色又は赤色を呈し、脂光を帯びたる玻璃質火山岩。
れきしじやう 瀝青炭(名)「鐵」英 Iron coal」石炭の一種。油質に富み、漆黑色を呈し、炭素の分量は無煙炭よりは少きもの。長き炭を發して燃焼す。
れきしじやう 瀝世女裝考(名)「書」わが國古今の女子の頭髪、服裝等に關する事項を、數十條に分ちて考證説明せるもの。四卷。山東京山の著。

れきしじやう 瀝節風(名)「つうふう(通風)に同じ」
れきしじやう 歴然(貌)「明らかに見わけの附くさま。ありあり。太平記因果歴然」
れきしじやう 歴代(名)「よ。だいたい。累世。累代。歴世」

れきしじやう 歴代皇紀(名)「書」神武天皇より後土御門天皇の文明九年までの事を、編年體に記せるもの。卷首に、神代十二代の事蹟の大體を記し、本文は五段に五段に對して、帝號・宮號・年號及び事件の重要なものを記せり。裏書、卷あり、合はせて六卷。洞院公賢の著。續群書類從に收む。一名、皇代曆皇代略記。歴代撮要。
れきしじやう 歴代滑稽傳(名)「書」荒木田守武・山崎宗鑑より松尾芭蕉に至る俳人の略傳と句讀を記し、卷首に、一枚起請及び俳諧指南の二文を載せたるもの。一卷。森川許六の著。巻尾の二文は、許六の俳諧に對する抱負を知り得る究竟の材料なり。
れきしじやう 歴代撮要(名)「書」れきたい(歴代)に同じ。
れきしじやう 歴代皇紀(名)「書」れきたい(歴代)に同じ。
れきしじやう 歴代和歌勅撰考(名)「書」萬葉集及び古今集以下の歴代の勅撰集につきて考證せるもの。六卷。吉田今世(註)の著。存探叢書に收む。
れきしじやう 歴道(名)「曆術に關する學問又それに精通せる人。中右記今日可有二日領之由、曆道奏聞」古の陰陽の學科の學科目。一。曆法を教へしもの。別に、漏刻の學科をも附屬せしめたり。後世、賀茂氏の世襲となれり。
れきしじやう 歴考(名)「司馬光の詩に「自槐機杼非遠器」とあり。ちよれき(杼機)に同じ」
れきしじやう 歴朝(名)「歴代の朝廷。代代のれきたてう(歴朝)に同じ」
れきしじやう 歴朝詩案(名)「書」大同、弘仁の頃より、徳川時代までの日本人の詩を集めたるもの。前後兩編に分れ、前編は二十卷にて、保元平治の頃までの諸家二百四十四人の作を掲げ、後編は七百六十九人の作を掲げて、八十卷とする豫定なりしが如く、なれども、出版せられしは二百二十二人の詩、十三卷・七冊のみ。常陸國守山(註)の藩主松平頼寛の編。江村北海の日本詩史に、編撰當を得ざる所あるを指摘せり。
れきしじやう 歴朝詔詞解(名)「書」續日本紀中の宣命六十二篇を抄出して、訓讀・解釋を施し、なほ、初に、宣命の意義・筆者・講儀式等につきての概説を敘したるもの。六卷。本居宣長の著。
れきしじやう 歴傳(名)「次次に傳ふること、又、次次に傳はること」土。
れきしじやう 歴任(名)「順次に、諸種の官職に任ぜらるること」
れきしじやう 歴年(名)「としつき。歳月」曆に定めたる一年、即ち陽曆の一年は三百六十五日(閏年は三百六十六日)なるが如き、これなり。
れきしじやう 歴年(名)「年を歴ること。また、とし。ととし。歳。累年。連年。歴歳」
れきしじやう 歴馬(名)「歴間に伏してある馬。俗果に妨げられて、志を伸ばしがたき人の譬」
れきしじやう 歴拜(名)「じゆんぱい(巡拜)に同じ」
れきしじやう 歴訪(名)「順次に訪問すること。歴問」
れきしじやう 歴博士(名)「古、陰陽の察に屬して、曆を作り、兼ねて、曆生に曆道を教ふることを掌りし官。定員一人。後、権の曆博士一人を置く。曆博士。リヤくはかせ」
れきしじやう 曆法(名)「曆日に關する法則」
れきしじやう 曆尾(名)「曆の末尾の義」年のくれ。年末。歳除。殘曆。
れきしじやう 曆本(名)「れきしじやう(曆書)に同じ」
れきしじやう 曆命(名)「曆數と天命と」

れきしじやう

れきしじやう

れきしじやう

れきしじやう

「日本列島」琉球列島」〔「べおくこと
れつち 列置」〔名〕つらねおくこと。なら
れつち 列峙」〔名〕並びそばだつこと。
れつちやうふ 烈丈夫」〔名〕れつし(烈士)
に同じ。
れつちよ 烈女・列女」〔名〕「戰國策の韓
の條に「非獨攝政之能、乃其姊者列女也」
とあり。操の正しき女。貞女。烈婦。
れつちよでん 烈女傳」〔名〕「書」列女は
烈女の義。支那の烈女の傳記を、母儀賢
明・仁智・貞慎・節義・婦通・變藝の七目に分
ちて集め記したるもの。七卷、漢の劉向
(???)の著。別に、續傳一卷あり。班昭の著
ともし、項原の著ともいひ、明かならず。
れつてん 列點」〔數〕「英」Rangeに
直線の上にある點。
れつてん 列傳」〔名〕「人」人の傳を列記
したるもの。『紀傳體の歴史の一部。人
臣の傳記を列ね記したるもの。(本紀・世
家等に對して)。「傳體」に同じ。
れつてんたい 列傳體」〔名〕きてんたい(紀
傳)たる(佛)Leitree 獨(獨)Leitree)」〔名〕「原語
は文字印刷書活字體などの義。品名・商
標製造所の名などを印刷して、商品に貼
附する紙片。なげば。
れつと 劣駑」〔名〕それつ(驽劣)に同じ。
れつとやう劣等」〔名〕等級の、普通より劣
りてあること。(優等に對して)
れつとやうせい 劣等生」〔名〕成績の劣等
なる生徒。(優等生に對して)。
れつとやうちやう 裂頭條蟲」〔名〕「動」
絲蟲の中に、頭部の裂けたるもの。長
さ二丈餘、各片の幅廣く、頭端にある一
對の縱溝により、腹の内壁に吸ひ着く。
れつとやうひん 劣等品」〔名〕質の劣等な
る品。〔「に對して」)
れつとやう 列内」〔名〕隊列の内部。(列外
れつとやう 列並」〔名〕「理」英 Parallel
connection)數箇の電池を連結するに、そ
の各箇の陽柱と陽柱と、又、陰柱と陰柱と
を連ねる裝置の方法。電燈・電燈・電動機
を連結するにもいひ、電燈及び電車等は、

をゑるわ ゐれるりら よゆや もめんむみま ほへふひは のねぬにな とてつちた そせすしさ こけくきか おえういあ

れんあいじやうじゆぎ 戀愛至上主義
「名」戀愛を人生の至上なるものと
し、結婚後と雖も、戀愛の情一たび去る
時、又、他の異性と相愛するに至るも、止
むを得ずとする主義。

れんあいせうせつ 戀愛小説
「名」戀愛
問題を取り扱ひたる小説。

れんあいもんだい 戀愛問題
「名」戀愛
の本質、その社會との關係等に關する問
題。

れんい 連騎
「名」さきなみ(小波)に
れんい 戀意
「名」戀ひ慕ふ心。

れんいん 連印
「名」一通の文書に、二人
以上の者が、その姓名を列記して、印を押
すこと。連名の印。連判。列判。(但し、連
印は、印形を用ふるに、連判列判は、
書判(即ち花押を用ひし時代の)にも、
判形(即ち印形を用ふるにも)いふ。

れんいん 連陰
「名」連日、空のくもる
こと。

れんいん 連引
「名」れんざ(連座)に同じ。
れんう 連雨
「名」連日の降雨。ながあ
め。淫雨。霖雨。

れんうんろく 連雲錄
「名」書。後陽成
天皇より東山天皇までの天皇親王法親
王皇子等の御連枝及び降誕、受禪即位、
行幸御幸遷幸崩薨宣下立坊薙染得
度轉任配流歸洛等の月日を記せるも
の。一卷。著者詳かならず。元祿十五年
閏八月五日寫との奥書あり。

れんえい 連營
「名」陣營を連ぬること、
又、連なれる陣營。
れんえい 連延
「名」連なり延ぶる
れんえふ 蓮葉
「名」蓮の葉。荷葉。
れんえん 瀲灩
「名」波の、空の光
を反射して、ちらちらとするさま。
れんか 葦下
「名」葦叢の下に同
じ。
れんか 連加
「名」(數)るゐか(累加)に同
じ。

れんか 廉價
「名」れん(廉)に同じ。
れんか 連荷
「名」はす。蓮葉。
れんか 連枷
「名」からさ(藪筭)に同じ。
れんが 連歌聯歌
「名」(文)二人にて、
三十一文字の和歌の上の句と下の句とを
分ちて作るもの。日本武(武)尊が、東征
の歸途、甲斐國酒折(酒折)の宮にて、「にひ
ばり筑波を過ぎて幾夜か寝つ」と宣ひ
しに、火焼(火焼)の翁の答へて、「かかなべ
て夜には九夜(九夜)日には十日を」と云ひ
しを、その起原とす。然るに、鎌倉時代の
初期以降、銀(銀)の連歌と、十七字の句と
十四字の句とを交互に連ねて、數十句に
及ぼす形式を生じ、句數によりて、五十
韻百韻など呼びしが、享祿天文之際、山
崎宗鑑荒木田守武出づるに及びて、思想
に、用語に、貴族の作風を開き、これを俳諧
の連歌といひ、又、單に俳諧ともいひ、從
前の連歌と併稱して、連俳ともいふに至
れり。つらねうた。筑波の道。調子俊子
内親王の女房二車まうて來て、連歌し、
歌詠みなどして、筑波問答わが國にては、
歌を連ねた連歌と申すにや。

れんが あはせ 連歌合
「名」和歌の歌合
(あはせ)に於けると同様、連歌師を左右に
分ち、その詠みたる句を、判者ありて、批
評し、優劣勝敗を定めしこと。兼載續談
「二聲と叩かぬ先に月を明けて。基佐が
句なり。連歌合の句なりしに」
れんが あふさ 連歌歌
「名」『連歌の席に
て、音のせぬやうにとて、用ひしものなる
より名づくといふ。要(カ)を抜き取り、
最小にて締めて遣ひし扇。伊勢音頭二見真砂
「その箱扇の月に雲、隠せば隠す忍路の、
車扇の扇夜(扇夜)にはさへ」
れんか 連衡
「名」漢書の刑法志に
「合縱連衡」とあり。衡は横の義。古、支
那にては、南北を縱とし、東西を横とした
り。支那の戰國時代に、秦の東方に位せ
る六國を、秦に連合せしめて、支那の統一
を圖らんとしてし。連横(横)。(合縱
(縦)に對して) 列國間の同盟。

れんかうぶん 聯構文
「名」(語)ちやうぶん
(重文)に同じ。
れんかい 連歌師
「名」連歌に長けた
る人。連歌の宗匠。徳川幕府の職制
の一。寺社奉行の支配に屬して、連歌の
事を掌りしもの。里村(稻巴)の商(坂)の
兩氏、世襲したり。れんしゆ(連衆)参照。
れんがしんじき 連歌新式
「名」(書)二
條良基の、應安五年、救濟(救濟)周阿と相
談して、連歌の古來の式を刪潤したるも
の。(一卷(二冊))。

れんがめすびと 連歌盜人
「名」めすびと
れんが(盜人連歌)に同じ。
れんがはじめ 連歌始
「名」室町・江戸兩
幕府にて行ひし、新年の連歌の會。室町
幕府のは正月十九日、江戸幕府のは、初は
正月二十日、承應年中以後は、同十一日に
行へり。朝廷の和歌會始に倣ひしなるべ
しといふ。れんじゆ(連衆)参照。
れんか 連加
「名」(數)るゐか(累加)に同
じ。
れんがふ 連合聯合
「名」つらなりあ
ふこと。組み合ふこと。同盟。三哲
れんさう 連想
「名」同じ。
れんがふうりだい 聯合賣出
「名」或地
域内の多數の商店が連合して行ふ賣出。
れんがふえんせつ 聯合演説
「名」二人
以上又は二團體以上、者が聯合して行ふ
演説。

れんがふかふぬじろくわい 聯合株主
總會
「名」二箇以上の株式會社の株主
が合併して開く總會。
れんがふかんたい 聯合艦隊
「名」同一
國の二箇以上の艦隊又は二箇國以上の艦
隊にて編制して、一人の司令長官の下に
屬せしめたる一艦隊。
れんがふかんだいじれいちゃうかん 聯
合艦隊司令長官
「名」聯合艦隊を統督
する司令長官。我國の艦隊のみより成る
場合のは、天皇に直隸する親補官とす。
れんがふく 聯合軍
「名」二箇國以
上の軍隊を聯合したる軍隊。その中の故
參・上級の武官を總司令官とするを、普通

とす。日大正三年以後の世界大戰亂に
於て、獨逸の兩國同盟及びこれに附隨せ
るバルカン諸國(ルマニヤを除く)の軍
隊を敵として戰ひし、露佛英三協商國
及びこれに参加せる諸國の軍隊。
れんがふてく 聯合國
「名」(法)次條に
同じ。
れんがふてくか 聯合國家
「名」(法)よ
きてく(複維)に同じ。
れんがふさきむ 聯合債務
「名」(法)各
債務者が各自、その一部分に就きての
義務を負ふ債務。
れんがふせつ 聯合説
「名」(哲)れんさう
せつ(聯想説)に同じ。
れんがふせん 連合線
「名」(音)「英」to
れんぞくせん 連續線
「名」見よ。
れんがふそうくわい 聯合總會
「名」二
箇以上の會社、法人等が合併して開く
總會。
れんがふちほうじんりんくわい 聯合地
方森林會
「名」地方森林會の審議すべ
き事項の利害關係が二府縣以上に涉る
時、その府縣の地方森林會の議員を聯合
して組織する會。
れんがふないかく 聯合内閣
「名」れんり
つないかく 聯合内閣に同じ。
れんがふは 聯合派
「名」(哲)れんさうは
(聯想派)に同じ。
れんがふはがき 聯合端書
「名」ばんこ
れんがふはがき 萬國聯合端書」の略。
れんがふはふ 聯合法
「名」(哲)れんさう
り(聯想率)に同じ。
れんがふへう 連合譜表
「名」(音)譜
表を、二箇或はそれ以上、間隔を置きて、
上下に重ね、左端を縱線と括弧の左邊と
同形なるものにて連結せるもの。各小
節の境界をなす縱線は、上下貫通連結す
ることも、然らざることもあり。ピアノ、
オルガン等の有鍵樂器を使用する時、左
手と右手との奏法を、別別に記する場合、合
奏又は合唱に於て、高音と低音とを區別
して記する場合、合唱又は聯唱に於て、各音
部の旋律を別別に記する場合、合奏に於て、

れんがふさきむ 聯合債務
「名」(法)各
債務者が各自、その一部分に就きての
義務を負ふ債務。
れんがふせつ 聯合説
「名」(哲)れんさう
せつ(聯想説)に同じ。
れんがふせん 連合線
「名」(音)「英」to
れんぞくせん 連續線
「名」見よ。
れんがふそうくわい 聯合總會
「名」二
箇以上の會社、法人等が合併して開く
總會。
れんがふちほうじんりんくわい 聯合地
方森林會
「名」地方森林會の審議すべ
き事項の利害關係が二府縣以上に涉る
時、その府縣の地方森林會の議員を聯合
して組織する會。
れんがふないかく 聯合内閣
「名」れんり
つないかく 聯合内閣に同じ。
れんがふは 聯合派
「名」(哲)れんさうは
(聯想派)に同じ。
れんがふはがき 聯合端書
「名」ばんこ
れんがふはがき 萬國聯合端書」の略。
れんがふはふ 聯合法
「名」(哲)れんさう
り(聯想率)に同じ。
れんがふへう 連合譜表
「名」(音)譜
表を、二箇或はそれ以上、間隔を置きて、
上下に重ね、左端を縱線と括弧の左邊と
同形なるものにて連結せるもの。各小
節の境界をなす縱線は、上下貫通連結す
ることも、然らざることもあり。ピアノ、
オルガン等の有鍵樂器を使用する時、左
手と右手との奏法を、別別に記する場合、合
奏又は合唱に於て、高音と低音とを區別
して記する場合、合唱又は聯唱に於て、各音
部の旋律を別別に記する場合、合奏に於て、

れんがふさきむ 聯合債務
「名」(法)各
債務者が各自、その一部分に就きての
義務を負ふ債務。
れんがふせつ 聯合説
「名」(哲)れんさう
せつ(聯想説)に同じ。
れんがふせん 連合線
「名」(音)「英」to
れんぞくせん 連續線
「名」見よ。
れんがふそうくわい 聯合總會
「名」二
箇以上の會社、法人等が合併して開く
總會。
れんがふちほうじんりんくわい 聯合地
方森林會
「名」地方森林會の審議すべ
き事項の利害關係が二府縣以上に涉る
時、その府縣の地方森林會の議員を聯合
して組織する會。
れんがふないかく 聯合内閣
「名」れんり
つないかく 聯合内閣に同じ。
れんがふは 聯合派
「名」(哲)れんさうは
(聯想派)に同じ。
れんがふはがき 聯合端書
「名」ばんこ
れんがふはがき 萬國聯合端書」の略。
れんがふはふ 聯合法
「名」(哲)れんさう
り(聯想率)に同じ。
れんがふへう 連合譜表
「名」(音)譜
表を、二箇或はそれ以上、間隔を置きて、
上下に重ね、左端を縱線と括弧の左邊と
同形なるものにて連結せるもの。各小
節の境界をなす縱線は、上下貫通連結す
ることも、然らざることもあり。ピアノ、
オルガン等の有鍵樂器を使用する時、左
手と右手との奏法を、別別に記する場合、合
奏又は合唱に於て、高音と低音とを區別
して記する場合、合唱又は聯唱に於て、各音
部の旋律を別別に記する場合、合奏に於て、

れんがふさきむ 聯合債務
「名」(法)各
債務者が各自、その一部分に就きての
義務を負ふ債務。
れんがふせつ 聯合説
「名」(哲)れんさう
せつ(聯想説)に同じ。
れんがふせん 連合線
「名」(音)「英」to
れんぞくせん 連續線
「名」見よ。
れんがふそうくわい 聯合總會
「名」二
箇以上の會社、法人等が合併して開く
總會。
れんがふちほうじんりんくわい 聯合地
方森林會
「名」地方森林會の審議すべ
き事項の利害關係が二府縣以上に涉る
時、その府縣の地方森林會の議員を聯合
して組織する會。
れんがふないかく 聯合内閣
「名」れんり
つないかく 聯合内閣に同じ。
れんがふは 聯合派
「名」(哲)れんさうは
(聯想派)に同じ。
れんがふはがき 聯合端書
「名」ばんこ
れんがふはがき 萬國聯合端書」の略。
れんがふはふ 聯合法
「名」(哲)れんさう
り(聯想率)に同じ。
れんがふへう 連合譜表
「名」(音)譜
表を、二箇或はそれ以上、間隔を置きて、
上下に重ね、左端を縱線と括弧の左邊と
同形なるものにて連結せるもの。各小
節の境界をなす縱線は、上下貫通連結す
ることも、然らざることもあり。ピアノ、
オルガン等の有鍵樂器を使用する時、左
手と右手との奏法を、別別に記する場合、合
奏又は合唱に於て、高音と低音とを區別
して記する場合、合唱又は聯唱に於て、各音
部の旋律を別別に記する場合、合奏に於て、

れんがふさきむ 聯合債務
「名」(法)各
債務者が各自、その一部分に就きての
義務を負ふ債務。
れんがふせつ 聯合説
「名」(哲)れんさう
せつ(聯想説)に同じ。
れんがふせん 連合線
「名」(音)「英」to
れんぞくせん 連續線
「名」見よ。
れんがふそうくわい 聯合總會
「名」二
箇以上の會社、法人等が合併して開く
總會。
れんがふちほうじんりんくわい 聯合地
方森林會
「名」地方森林會の審議すべ
き事項の利害關係が二府縣以上に涉る
時、その府縣の地方森林會の議員を聯合
して組織する會。
れんがふないかく 聯合内閣
「名」れんり
つないかく 聯合内閣に同じ。
れんがふは 聯合派
「名」(哲)れんさうは
(聯想派)に同じ。
れんがふはがき 聯合端書
「名」ばんこ
れんがふはがき 萬國聯合端書」の略。
れんがふはふ 聯合法
「名」(哲)れんさう
り(聯想率)に同じ。
れんがふへう 連合譜表
「名」(音)譜
表を、二箇或はそれ以上、間隔を置きて、
上下に重ね、左端を縱線と括弧の左邊と
同形なるものにて連結せるもの。各小
節の境界をなす縱線は、上下貫通連結す
ることも、然らざることもあり。ピアノ、
オルガン等の有鍵樂器を使用する時、左
手と右手との奏法を、別別に記する場合、合
奏又は合唱に於て、高音と低音とを區別
して記する場合、合唱又は聯唱に於て、各音
部の旋律を別別に記する場合、合奏に於て、

とす。日大正三年以後の世界大戰亂に
於て、獨逸の兩國同盟及びこれに附隨せ
るバルカン諸國(ルマニヤを除く)の軍
隊を敵として戰ひし、露佛英三協商國
及びこれに参加せる諸國の軍隊。
れんがふてく 聯合國
「名」(法)次條に
同じ。
れんがふてくか 聯合國家
「名」(法)よ
きてく(複維)に同じ。
れんがふさきむ 聯合債務
「名」(法)各
債務者が各自、その一部分に就きての
義務を負ふ債務。
れんがふせつ 聯合説
「名」(哲)れんさう
せつ(聯想説)に同じ。
れんがふせん 連合線
「名」(音)「英」to
れんぞくせん 連續線
「名」見よ。
れんがふそうくわい 聯合總會
「名」二
箇以上の會社、法人等が合併して開く
總會。
れんがふちほうじんりんくわい 聯合地
方森林會
「名」地方森林會の審議すべ
き事項の利害關係が二府縣以上に涉る
時、その府縣の地方森林會の議員を聯合
して組織する會。
れんがふないかく 聯合内閣
「名」れんり
つないかく 聯合内閣に同じ。
れんがふは 聯合派
「名」(哲)れんさうは
(聯想派)に同じ。
れんがふはがき 聯合端書
「名」ばんこ
れんがふはがき 萬國聯合端書」の略。
れんがふはふ 聯合法
「名」(哲)れんさう
り(聯想率)に同じ。
れんがふへう 連合譜表
「名」(音)譜
表を、二箇或はそれ以上、間隔を置きて、
上下に重ね、左端を縱線と括弧の左邊と
同形なるものにて連結せるもの。各小
節の境界をなす縱線は、上下貫通連結す
ることも、然らざることもあり。ピアノ、
オルガン等の有鍵樂器を使用する時、左
手と右手との奏法を、別別に記する場合、合
奏又は合唱に於て、高音と低音とを區別
して記する場合、合唱又は聯唱に於て、各音
部の旋律を別別に記する場合、合奏に於て、

れんげ

れんげつ

れんげわ

をぬゑわ るれるりら よゆや もめんむみま ほへふひは のねぬにな とてつちた そせすしさ こけくきか おえういあ

れんじ 練師「名」『白孔子帖に「道士修行、德高思精者、謂之練師」とあり』「道士の道士の尊稱」。

れんじ 練屍「名」死骸をとりをさむるれんじ 練絲「名」絲を煮て、柔らかにするれんじ 練糸「名」糸を煮て、柔らかにする

れんじ 蓮師「名」蓮に依る蓮師のれんじ 蓮子「名」窓に堅に並べて取り附けたる木又は竹、れにし。大鐘、中門の廊のれんじより覗かせ給へば」

れんじ 連辭「名」『哲けいじ(繁辭)』に同じ。れんじ 練字「名」詩歌・文章の文字を洗練すること。推敲。

れんじ 練字「名」詩歌・文章の文字を洗練すること。推敲。

れんじ 舞の舞の略言なるべし」

れんじ 舞の舞の略言なるべし」

れんじ 舞の舞の略言なるべし」

れんじ 舞の舞の略言なるべし」

れんじ 舞の舞の略言なるべし」

れんじ 舞の舞の略言なるべし」

れんじ 舞の舞の略言なるべし」

れんじ 舞の舞の略言なるべし」

れんじ 舞の舞の略言なるべし」

れんじ 舞の舞の略言なるべし」

れんじ 舞の舞の略言なるべし」

れんじ 舞の舞の略言なるべし」

れんじ 舞の舞の略言なるべし」

れんじ 舞の舞の略言なるべし」

れんじ 舞の舞の略言なるべし」

れんじ 舞の舞の略言なるべし」

れんじ 舞の舞の略言なるべし」

れんじ 舞の舞の略言なるべし」

れんじ 舞の舞の略言なるべし」

れんじ 舞の舞の略言なるべし」

れんじ 舞の舞の略言なるべし」

れんじ 舞の舞の略言なるべし」

れんじ 舞の舞の略言なるべし」

れんじ 舞の舞の略言なるべし」

れんじ 舞の舞の略言なるべし」

れんじ 舞の舞の略言なるべし」

れんじ 舞の舞の略言なるべし」

れんじ 舞の舞の略言なるべし」

れんじ 舞の舞の略言なるべし」

れんじ 舞の舞の略言なるべし」

れんじ 舞の舞の略言なるべし」

れんじ 舞の舞の略言なるべし」

れんじ 舞の舞の略言なるべし」

れんじ 舞の舞の略言なるべし」

れんじ 舞の舞の略言なるべし」

れんじ 舞の舞の略言なるべし」

れんじ 舞の舞の略言なるべし」

れんじ 舞の舞の略言なるべし」

れんじ 舞の舞の略言なるべし」

れんじ 舞の舞の略言なるべし」

れんじ 舞の舞の略言なるべし」

れんじ 舞の舞の略言なるべし」

れんじ 舞の舞の略言なるべし」

れんじ 舞の舞の略言なるべし」

れんじ 舞の舞の略言なるべし」

れんじ 舞の舞の略言なるべし」

れんじ 舞の舞の略言なるべし」

れんじ 舞の舞の略言なるべし」

れんじ 舞の舞の略言なるべし」

れんじ 舞の舞の略言なるべし」

れんじ 舞の舞の略言なるべし」

れんじ 舞の舞の略言なるべし」



れんじ 舞の舞の略言なるべし」

れんじ 舞の舞の略言なるべし」

れんじ 舞の舞の略言なるべし」

れんじ 舞の舞の略言なるべし」

れんじ 舞の舞の略言なるべし」

れんじ 舞の舞の略言なるべし」

れんじ 舞の舞の略言なるべし」

れんじ 舞の舞の略言なるべし」

れんじ 舞の舞の略言なるべし」

れんじ 舞の舞の略言なるべし」

れんじ 舞の舞の略言なるべし」

れんじ 舞の舞の略言なるべし」

れんじ 舞の舞の略言なるべし」

れんじ 舞の舞の略言なるべし」

れんじ 舞の舞の略言なるべし」

れんじ 舞の舞の略言なるべし」

れんじ 舞の舞の略言なるべし」

れんじ 舞の舞の略言なるべし」

れんじ 舞の舞の略言なるべし」

れん

オムたし

六

ををわ ゐれるりら よゆや もめんむみま ほへふひは のねねにな とてつちた そせすしさ こけくきか おえういあ

れんみん

れんやぐ

れんりー

をゑひわ ゐれるりら よゆゆ もゆんむみま ほへふひは のねねにな とてつちた そせすしぎ こけくまか おえういあ

